

Market Flash

庚子は芽吹きと繁栄の年
2020年 Top Risks

2020.01



日本アルプス電子 株式会社
NIHON ALPS ELECTRONICS CO.,LTD.



2020年の干支は「庚子」（かのえ・ね）。新たな芽吹きと繁栄の始まりです。東京オリンピックがいよいよ開催されます。7月～9月の間は東京を中心に世界中から人が集まって、日中の東京の人口は倍に膨れ上がるでしょう。そして、今年のラグビーワールドカップ以上の盛り上がりが見られるでしょう。オリンピックの後には日本経済あらたなはかなり落ち込むという後ろ向きの意見が多いようですが、新たな芽吹きと繁栄の始まりの種はあるように思います。5G・IOTを始めとしてこれから数年の間に世界は大きく変わっていくことが予想されています。2020年は次世代へとつないで繁栄をもたらすような年、それは一個人にとっても同じことで、仕事でも趣味でも、私生活においても何か新しいことにチャレンジしていく年にしたいと思っています。

本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

干支で占う2020年 子年(ねずみ年)

2020年は**庚子(かのえ・ね)**

「**庚子**」は、「干支」の組み合わせの第37番目で、十干の「**庚**」は7番目に当たる。を意味する。

十干の「**庚(かのえ)**」は、季節でいえば秋の始めであり、**生命のサイクルで結実や形成という変化転換を表す**。また、「**庚**」という漢字は、杵を両手で持ち上げる象形と植物の成長が止まって新たな形に変化しようとする象形からできた文字で、「**かわる**」や「**つぐ**」という意味がある。これらを考え合わせると、「**庚**」とは**結実の後に転身すること**を意味する。

十二支の「**子**」は**種子が土中で発芽したまさにその瞬間を意味する**。その後、「**丑・寅・卯・辰・巳**」と徐々に芽が育ち、「**午**」で陰陽の転換点を迎え、「**未・申・酉・戌**」と結実する。そして最後の「**亥**」で地面に落ちた種が土中へ埋まり、次世代の生命へと繋がっていく。

「**子**」は**生命のスタートであり、繁殖や発展を意味する**。

また「**子**」という漢字は、頭の大きな赤ん坊が両手を広げた象形文字で、子どもを表し、そこから小さい、生む、種子、従うといった意味が派生した。古代中国では立派な男性に対する敬称にも使われ、孔子、孟子、老子、荘子など優れた哲学者によく用いられるなど、「**子**」の文字には「**賢い・聡い**」という意味も内包されている。

その関係性について陰陽五行思想でみると、「**庚**」は**金に属し**、「**子**」は**水**、これは「**金生水**」という**相生(そうせい)**と呼ばれる**関係にある**。相生とは互いを生かす関係のことで、金はやさしい空気を冷やして水を作り出し、溢れた水の流れが土中に眠る金を洗い出し、人の手元に運んでくるとされる。

「**庚**」は**カノエ**、「**金の兄**」とも書き、陰陽五行思想では「**金の陽**」にあたる。金はやさしい金属のごとき**冷徹・堅固・確実な性質**を持ち、秋の象徴でもある。陽は大きなとか強いといったイメージだと考えると理解しやすい。

つまり2020年の干支「**庚子**」は、**非常に冷静なひらめきとクレバーな行動で転身し、新しく始めることがとてもうまくいくことを意味している**。

次世代へとつないで繁栄をもたらすような年、それは一個人にとっても同じことで、今年も仕事でも趣味でも、私生活においても何か新しいことにチャレンジしていく年のようである。



* 東洋思想に見る干支 *

干支は十干と十二支の組み合わせである。

十干は太陽の運行や動物の誕生から終焉までを10等分して表現したもので、「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」で示される。

十二支は月の満ち欠けや作物の芽吹きから収穫までを12等分して表現したもので、「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」で示される。

この十干を組み合わせることで、世の中の循環、大いなる意思が司る天地の理を探ろうとしたものである。

また、干支は陰陽五行思想と呼ばれる古代中国の思想に基づいている。陰陽五行思想とは世の中のすべては5種類の元素「木・火・土・金・水」に分類され、「陰・陽」に分かれる。これらは独自の性質を持ち、お互いに影響を与え合っている。

つまり十干と十二支の組み合わせによっては、お互いを高め合ったり、もしくは打ち消し合ったり、中には片方をダメにしてしまうこともあるなど、関係性が重要な意味を持つ。

子の雑学

【ねずみ年(子年)生まれの特徴】

ねずみが「寝ず身」になるように、真面目にコツコツと働き、儉約家でもあるので、若いうちからお金もたまる。しかし、不要なものにはお金を使わないので、度を越すとケチとみられてしまうことも。勤が鋭く、ひらめきもあるので、それを活かすと難を逃れられる。また、適応能力が高く、コミュニケーションもうまいので、周囲の人を惹きつける性格。

【子という字の成り立ち】

「子」という字は、頭部の大きな幼児の形からきた象形文字。

中国の『漢書』では、「子」は、繁殖する・うむという意味をもつ「孳」という字からきており、新しい生命が種子の中に萌(きざ)し始める状態を表している。中国伝来の十二支は、もともと植物が循環する様子を表しているのので、十二支の一番目にそのような意味をもつ「子」がくるのである。

【ねずみにまつわることわざ】

●窮鼠猫を噛む(きゅうそねこをかむ)

追い詰められたネズミが逃げ場を失ったときには、必死で猫に噛みつくことがあるという意味から、「絶体絶命の窮地に追い詰められれば、弱い者でも強い者に逆襲することがある」というたとえ。

●大山鳴動して鼠一匹(たいざんめいどうしてねずみいっぴき)

大きな山が音を響かせて揺れ動くので、大噴火でも起こるのかと思っていたが、鼠が一匹出てきただけだったという意味から、「大騒ぎしたわりには、実際には結果が小さいこと」のたとえ。

●鼠に引かれる

ひとり家に残されて寂しい様子のたとえ。

●鼠算／鼠の子算用

急激に増えていくことのたとえ。

和算の一に、「正月にひと組みの鼠が子を12匹生む。そして親と合わせて14匹になる。毎月それぞれが、また12匹ずつ子を生むとすると、12月には鼠は何匹になるか」という問題があり、276億8257万4402匹になる。このように鼠算の結果は膨大な数となるため、「急激に数が増えること」を「鼠算式に増える」と表現することがある。



子年の主な出来事

2008年	<p>福田内閣、9月24日より麻生内閣 リーマンショックで世界同時金融危機に陥った。</p> <p>日本人としては史上最多の4人(南部陽一郎博士、小林誠博士、益川敏英 博士、下村脩博士)がノーベル賞を受賞。 北京オリンピック。北島康介が連続2冠。女子ソフトボールが悲願の金メダル。 「グ〜!」(エド・はるみ)、「アラフォー」が流行語</p>
1996年	<p>村山内閣⇒橋本内閣 「日本版ビックバン」 羽生善治が25歳の若さで、史上初の将棋タイトル七冠独占を達成。 アトランタオリンピック 有森マラソン銅メダル「自分で自分をほめたい」 たまごっちブーム</p>
1984年	<p>中曽根内閣 「国鉄民営化」 昭和を代表とする未解決事件「グリコ・森永事件」が起きた年。江崎グリコ社長の誘拐事件に始まり、放火や毒入り菓子のばらまきに発展して、国民をパニックに陥れた。警察側は犯人を名乗る「かい人21面相」と何度も接触したのにも関わらず、度重なる失態により取り逃がしており、未だに多くの謎が起こる事件。 ロサンゼルスオリンピック 柔道の山下金メダル エリマキトカゲ大人気</p>
1972年	<p>田中角栄内閣 「日本列島改造論」 田中角栄首相が訪中し、北京で周恩来首相とともに「日中共同声明」に署名をしたことにより、敗戦後27年間の長きにわたり断絶していた国交が回復した。 また同年は、それまでヨーロッパ列強国の植民地とされていたアフリカの17カ国が一斉に独立を果たしたので「アフリカの年」とも呼ばれている。 ミュンヘンオリンピックでのテロ事件 サッポロ冬季オリンピック カシオが世界初の小型電卓を発売 浅間山荘事件 グアムで横井正一さん発見</p>
1960年	<p>第一池田内閣発足 「国民所得倍増計画」 日本でカラーテレビの本放送がスタートした年。当時は白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫の「三種の神器」がようやく普及してきた頃。同じ年の2月23日に天皇家に徳仁親王が誕生したことも手伝って、カラーテレビが爆発的に売れた。 ローマオリンピック 裸足の王者 アベベがマラソンで金メダル 「ダッコちゃん」ヒット インスタントコーヒー登場</p>



「子(ね)は繁盛、丑(うし)つまずき、寅(とら)千里を走り、卯(う)跳ねる、辰巳(たつみ)天井、午(うま)尻下がり(ひつじ)は辛抱、申酉(さるとり)騒ぐ、戌(いぬ)笑い、亥(い)固まる」といわれる。

子年の株式市場は格言通りであれば上昇の一途をたどるのであるが、過去を見る限り決してそうとは言えない。特に前の子年にはリーマンショックが起こっている。(ただし、これを除けば概ね上昇しているといえるが・・・) それより気になるのが来年の丑年は「つまずき」でオリンピック後の動向が気になることである。

年始の始値＝15,155.73円
年末の終値＝8,859.56円 -6,296.17円(-58.46%)
2008年9月15日に、米投資銀行リーマン・ブラザーズが連邦倒産法第11章の適用を申請し、経営破綻した。これがいわゆる「リーマンショック」、チャートを見ると、それに呼応するように、日経平均株価も9月末から10月にかけて大幅に下げていることがわかる。



年始の始値＝19,945.68円
年末の終値＝19,361.35円 -584.33円(-3.3%)
年の始値と終値で比較しても、また、年内のチャートの動きを見ても「小幅な値動き」にとどまり、「繁栄」感はありません。



この2年前から、「失われた20年」と言われる時代がスタート

年始の終値＝9,927.11円
年末の終値＝11,542.60円 +1615.49円(+16.3%)
若干夏ごろに沈んでいますが、日経平均株価はおおむね右肩上がり。年始から年末までの値上がり率は16.3%と、まずまず「繁栄」と言ってもいい一年ではないでしょうか。トヨタ自動車<7203>が製造業としては日本初の「売上高5兆円企業」となったのも、この年から



年始の終値＝2,712.31円
年末の終値＝5,207.94円 +2495.63円(+92.0%)
株価がおおよそ倍になるといって、まさに「繁栄」の一年。チャートを見ても大きな崩れはない、きれいな右肩上がり。連合赤軍による「あさま山荘事件」など物騒な出来事もあったが、経済的には順調で、札幌、福岡、川崎の各市が政令指定都市になり、人口増や都市の繁栄、ひいては日本経済の繁栄が偲ばれる。



年始の終値:869.34円
年末の終値:1,356.71円 +487.37円(+56.1%)
戦後の高度成長期の中でも特に長く続いた「岩戸景気」(1958年7月～1961年12月)の真っ最中だったこの年。株価も年間で56.1%増と、こちらも「繁栄」を絵に描いたような一年





2020年 Top Risks

アメリカの国際政治学者イアン・ブレマー博士が率いるユーラシア・グループという会社が毎年発表する「Top Risks」という報告書がある。

ブレマー氏が代表を務めるユーラシア・グループは、国際的な政治リスクについて研究するコンサルティング会社で、毎年初めにその年の世界の政治リスクトップ10を予想して発表している。

「Top Risks 2020」

今年も中心はトランプ大統領

- (1) 誰が米国を統治するか？(米国大統領選挙)
- (2) 米中のテクノロジーに関するデカップリング
- (3) 米中関係
- (4) 世界の溝を埋められない多国籍企業
- (5) モディ化されたインド
- (6) 欧州の地政学
- (7) 気候変動に関する政治と経済
- (8) イスラム教シーア派の三日月地帯
- (9) 南米の不満
- (10) トルコ



1. 「不正」米大統領選

11月の米大統領選を前に米国の制度が前例のない形で試される見通しだ。市場調査会社イプソスが実施した9月の世論調査によれば、投票が公正に行われると回答した米国民は53%にとどまった。不正行為が信頼できる形で告発される中でトランプ氏が勝利すれば選挙の無効が申し立てられるだろうし、トランプ氏が負けた場合でも同じだ。

2. 技術の分断

米中テクノロジー企業間の競争は、半導体やクラウドコンピューティング、次世代通信規格5Gなどの戦略上重要な分野以外のより幅広い経済活動にも広がる見通し。この結果、世界的なバリューチェーンのシフトが加速する一方、中国企業は投資水準が押し下げられ、株式上場が妨げられる可能性がある。

3. 米中関係

貿易戦争は休戦状態にあるものの、事態打開の可能性は低い。米国は中国企業への出資規制の取り組みや制裁、技術管理など中国に強硬な措置を講じる見込み。これに対し中国は企業を「信頼できない組織のリスト」に加えることで報復するだろう。トランプ大統領が再選に集中する中で、習近平国家主席は同大統領が香港と台湾問題でどれだけ押し返してくるか試し、予想外の反発を招く恐れがある。



2020年 Top Risks

4. 多国籍企業の経営首脳

各国が経済成長鈍化や格差拡大、安全保障問題に取り組む中、世界的に多国籍企業の経営首脳は一段と対立的な規制環境に直面するだろう。大手ハイテク企業の規制は米国で支持を拡大しており、米国のこれら企業の利益見通しは既に下押し圧力を受けている。

5. インド首相

インドのモディ首相の物議を醸す社会政策で、同国の宗派を巡る不安定さが増すほか、同国は外交政策と経済の両面で後退する見通しだ。同首相の社会政策アジェンダは市場開放に反対し、経済ナショナリズムを掲げるヒンズー至上主義の支持母体の権限を拡大する内容で、経済改革を実現する余地がその結果狭まっている。

6. 欧州が引き起こす摩擦

欧州は軍需品貿易や技術開発の障壁を取り除こうとして米中と争うと予想される。トランプ政権は、特に欧州の北大西洋条約機構(NATO)加盟国のほとんどが防衛費支出の公約を順守していないことから、こうした動きを侮辱的と見なすだろう。このため自動車や消費財など輸出への依存度が高い欧州の一部セクターに対し、懲罰的な関税が賦課される公算が大きくなる。

7. 気候変動

各国政府や企業首脳、投資家は今年、環境と持続可能性、ガバナンスの基準を守るよう一段の圧力を受けるほか、コスト増にも対応するよう求められるだろう。特に地球温暖化の影響で自然災害が珍しくなくなっているため、社会運動や世情不安が高まり得る。

8. 中東

ユーラシア・グループはイラン革命防衛隊のソレイマニ司令官殺害による米国とイランの緊張激化が地域の不安定化を招くとしたものの、世界的なリスクとしては下位にランク付けした。ブレマー氏はイランが比較的小規模な攻撃を行った場合でも、「米国の反撃はトランプ大統領がツイートしたよりも釣り合いの取れた規模になる」と分析した。

9. 中南米での不満

中南米では成長の停滞や汚職、サービスの質の低さに対する国民の不満が強く、政治の不安定化リスクは引き続き高いだろう。アルゼンチンは今後も民間債権者や国際通貨基金(IMF)との難しい協議が続く見通し。エクアドルのモレノ大統領は歳出削減や歳入増が難航し、IMFからの融資プログラムに圧力がかかるだろう。今年4月に新憲法導入の是非を問う国民投票が行われるチリでは、歳出拡大や規制強化などが経済に打撃を与える見通し。

10. トルコの挑発

エルドアン大統領は今年、自分の支持率が下がったと感じれば挑発行為に出る可能性があり、その場合は現在でも不調なトルコ経済がさらに打撃を受けるだろう。米議会主導のトルコ制裁はおそらく今年前半に発効する見込みで、トルコ・リラには下押し圧力がかかる見通し。エルドアン大統領が対抗して対米制裁を科せば、緊張は激化する。